

はばたき賞の制定について

はばたき賞は、肢体不自由教育の先駆者として活躍された元全国肢体不自由養護学校会長の藤田貞夫先生（元愛知県立名古屋養護学校校長）が、その著書「子供は何を望んでいるか―障害とたたかっている子ら」の発売を、名古屋空港口ターリークラブの委員長青山哲也氏に託された時の印税及び販売代金四、〇九六、四一五円を基金として設けられたものである。昭和五十二年、この浄財は、同クラブ会長高嶋昇一氏から全国肢体不自由養護学校校長会総会において、「全国はばたきの会」を設立することを決定し、斯道奨励の一助として「はばたき賞」並びに「はばたき奨励賞」を制定した。「はばたき賞」は、障害を克服して学業・生活に努力を重ねる児童生徒の表彰に、「はばたき奨励賞」は、肢体不自由教育の実践研究に大きな業績を挙げた学校や教員に授与するものとしてスタートした。第一回はばたき賞等は昭和五十三年度から授与されることになり、今日に至っている。

はばたき賞の制定にあたっては、模範となる肢体不自由の「模範」とは何かとか、対象を小・中・高いずれの学部学年でも良いのか、人数は何人までかとか種々の質問も出たが、最終的には障害に負けず日常生活や学習等に努力をして他の模範となる中学部または高等部の三年生というのを原則とした。また、年次の対象人数は全国六ブロックからそれぞれ二名ずつを、各ブロックごとに推薦し、毎年一月の定例校長会の理事会で決定することにした。

はばたき奨励賞は、種々協議の結果、文部省の教育課程研究指定校と特殊教育実験学校に対して、研究終了年度に贈ることとした。症状は、書家としても有名で日本肢体不自由児協会主催の美術展の書の審査員でもある山下忠先生に書いていただいたもの、楯は、空港口ターリークラブにちなんで、大鷲がはばたく勇壮な型をもって当てた。

これまで、「はばたき賞」受賞生徒は百三十名を超え、「はばたき奨励賞」を送った学校も二十数校になる。都道府県によっては、地方紙に大きく受賞者のプロフィールなどを紹介されている例もあり、肢体不自由児教育への理解・啓発にもなっている。

昭和五十八年には名古屋空港口ターリークラブの青山さんが、東京都立小平養護学校（当時の事務局）にわざわざ訪問され、有効に活用していると感激されて帰られた。

心配なことは、元金約四百万円の預金利息をもって運営しているため、金利の低下の場合はなんらかの対策を講じる必要があるということである。

（第五代全国肢体不自由養護学校校長会長 中島 秀夫 昭和 54～58）



はばたき賞 賞状と楯

